

『生徒指導提要』に観る英語授業の役割

A View on Teaching English Based on *Student Guidance Summary* by MEXT^{※1}

小野 祥康*

ONO, Yoshiyasu

概要

令和4年12月、文部科学省の『生徒指導提要』（以下、改訂版）が12年ぶりに改訂された。とりわけ現代的な学校課題に対応するために新たなポイントが盛り込まれているが、文部科学省（2010）の旧版『生徒指導提要』（以下、旧提要）ではいわゆる「積極的な生徒指導」や3つの留意点などについて言及され、児童生徒の健全な発達を促すための教育活動の重要性が指摘されてきた。しかしながら、とりわけ学校教育における課題は山積しており、時代の変化に伴って新たな問題も多く発生し、同時に学習指導要領の改訂や「令和の日本型学校教育」、「GIGAスクール構想」などにより授業の進め方なども変化してきている。本稿では、生徒指導の機能を活かした授業づくりについて、改訂版のポイントを踏まえ、特に英語の授業や言語活動の進め方に視点を当てて考察したい。

1. はじめに

「生徒指導」という言葉は、どちらかと言えば問題行動にどのように対応するかといったイメージであることが、これまでよく指摘されてきた（例えば、滝, 2011）。そのため、旧提要では、生徒指導は「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」（文部科学省, 2010, p.1）とし、いわゆる「積極的な生徒指導」を踏まえて学校の全ての教育活動を推進するものと規定している。特に、その際は、①自己存在感をもたせること、②共感的な人間関係の育成、③自己決定の場を与えることの3点（以下、まとめて記述するときは「生徒指導の3つの機能」とする）に留意しながら教育課程を編成することが重要であるとしている。

しかしながら、いじめ・不登校の問題やSNSなど児童生徒を取り巻く環境が劇的に変化していく中で、学習指導要領が改訂され、「主体的・対話的で深い学び」の創造や、「令和の日本型学校教育」といったワードが躍る。また、児童生徒が一人1台のデジタル端末をもつことやそれらをフルに活用した学習活動の展開、いわゆる「GIGAスクール構想」は新型コロナウイルス感染症拡大防止への対応と相ま

って、休校中も学びを止めないための策として前倒しでの導入となった。

このように大きな変化を遂げていく学校教育の中で、旧提要がもつ性格を発展させ、今日的な教育の諸課題に対応できるよう改訂版が公表され、特に「発達支持的生徒指導」といった言葉や、旧提要における生徒指導の3つの機能に加え、④「安全・安心な風土の醸成」といった点が挙げられている。

こうした生徒指導の視点を大切にしながら教育活動が推進され、特に子どもたちが多くの時間を過ごすことになる授業という場においても、生徒指導上の留意点を踏まえた学習活動が行われてきた。

本稿では、改訂版の趣旨に照らして現行学習指導要領の特に小・中学校における外国語（英語）の授業について、言語活動の内容を整理したり、実際の授業場面を考察したりすることを通して、改訂版に観る英語授業の役割について論じていきたい。

2. 生徒指導の機能を生かした学習指導

2. 1 旧提要における学習指導について

旧提要では、学習指導における生徒指導として2つの側面があるとしている。まず、「各教科等における学習活動が成立するために、一人一人の児童生徒が落ち着いた雰囲気の下で学習に取り組めるよう、

基本的な学習態度の在り方についての指導を行うこと」(文部科学省, 2010, pp. 5-6)である。もう一つは、「各教科などの学習において、一人一人の児童生徒が、そのねらいの達成に向けて意欲的に学習に取り組めるよう、一人一人を生かした創意工夫ある指導を行うこと」(上掲, p. 6)であり、旧提要ではこの後者の視点が非常に重要であることが述べられている。

前者の指導が成立してはじめて後者が成り立つのであり、同列に扱う危険性については指摘もあるが(例えば、藤, 2018)、実際の授業場面ではこれら2つの視点は不可分のものであると考える。

では、生徒指導の機能を生かした学習指導の具体とはどのようなものであろうか。旧提要では教科における生徒指導の推進の在り方として、次の5点を挙げている。

- (1) 授業の場で児童生徒に居場所をつくる
- (2) わかる授業を行い、主体的な学習態度を養う
- (3) 共に学び合うことの意義と大切さを実感させる
- (4) 言語活動を充実させ、言語力を育てる
- (5) 学ぶことの意義を理解させ、家庭での学習習慣を確立させる(文部科学省, 2010, pp. 23-25)

(1)については、児童生徒一人一人の学習状況を把握し、個々のよさや課題解決のために授業を工夫・改善することの重要性を指摘している。また、(2)については、ICT機器の積極的な活用などについても言及しており、主体的な学習態度を育むためにはGIGAスクール構想以前からICT機器がわかる授業を行うためのツールの一つであることが示されている。(3)ではペア・グループ活動など学び合いの場面を取り入れること、(4)では旧学習指導要領(小・中学校での告示は2008年)でも柱の一つとされていた言語活動の充実がよりよい人間関係の構築にもつながると記されている。また、(5)では教科の学習を実生活と結び付けることを踏まえ、家庭学習の習慣を確立させることにも触れている。

これをうけて、学校現場では、生徒指導の機能を生かした学習指導について様々な取組がされてきた。井上(2020)は、旧提要における生徒指導の3つの機能を具体的な授業場面で例示し(表1)、京都市教育委員会が作成した「生徒指導の三機能チェックリスト」を基にアンケートを取った結果、全体的には項目によって小学校教員と中学校教員の評価の相違があることも報告している。こうした校種の特性による差異も踏まえながら、教師自身が授業を

表1 生徒指導の3つの機能を踏まえた具体的な授業場面(井上, 2020)

【児童生徒に自己存在感を与える授業場面】
・間違った応答を大切にしたり、つぶやきを取り上げ発表のチャンスを与える
・プリントやノート、テスト等に、その児童生徒に応じた個別のコメントを書いて返す
・適切に呼名したり、目を見て話したりするなど、一人一人を大切に
【共感的な人間関係を育成する授業場面】
・チャイムと同時に授業を始め、チャイムと同時に授業を終える
・仲間の意見にうなずいたり、拍手したりするように促す
・ペアやグループ学習では、お互いのよさを認め合えることができる相互評価を取り入れる
【自己決定の場を与える授業場面】
・一人調べをしたり、考えたりする時間を十分に与える
・考えをより明確にするため、ペアやグループ学習を取り入れる
・本時の学習を振り返り、これからの学習について考える場を設ける

振り返り授業を改善する重要性を指摘している。

川上(2020)は、授業中において成長を促す指導の事例として、自己決定の場として自分の意見をアウトプットさせる場を設定したり、ワークシートを準備したりすること、あるいは共感的な人間関係を育成する場として間違ってもよいとする雰囲気づくりを目指すことや、相手の意見にうなずいたり拍手したり意見を添えたりするなど何らかの反応を促す声掛けをすることが大切であるとしている。

秋田県教育委員会(2021)は、生徒指導についての教師用研修資料の中で、自己存在感をもたせる授業を「児童生徒一人一人に学ぶ楽しさや成就感を味わわせることができる授業」、共感的な人間関係を育成する授業を「お互いに認め合い、学び合うことができる授業」、そして自己決定の場を与える授業を「自ら課題を見付けそれを追究し、考え、判断し、表現することができる授業」とし、これら3つを通して「全ての児童生徒が『参加』している授業」を保障することが重要であると述べている。また、京都市と同じように「生徒指導を行う際に強調される三つのポイントを生かした授業づくりのためのチェックリスト」を研修資料として公表し(表2)、そ

表2 生徒指導を行う際に強調される三つのポイントを生かした授業づくりのためのチェックリスト（秋田県教育委員会，2021）

ポイント	No.	手立て（項目）
自己存在感を実感する	1	名前を呼んだり、目を見て話したりするなどして、児童生徒自身に存在を感じさせるようにしている。
	2	少数意見であっても、その意図をくみ取るようにするなどして大切に扱うようにしている。
	3	つぶやきにも耳を傾け、全体の場で発表するチャンスを与えるようにしている。
	4	児童生徒相互が協力して学習できるように、グループでの学習などを取り入れている。
	5	全員が応答できたり、参加しているという気持ちをもてたりするように、発問等を工夫している。
	6	黒板に、発表者の名前を書いたり、ネームプレートを使ったりして、互いのがんばりが視覚的に伝わるようにしている。
	7	授業の中で、「よくできたね」「がんばっているな」等の、承認や賞賛、励ましを行っている。
	8	児童生徒の実態を把握し、授業のどの場面でどの児童生徒を活躍させるかを考えている。
	9	多様な考えを提示し、互いの考えのよさに気付かせる工夫をしている。
	10	自己表現が苦手な児童生徒のために多様な表現方法を提示し、指導している。
共感的な人間関係を育成する	11	よい姿をほめ、好ましくない姿は正すようにしている。
	12	たどたどしい発言でも言い終わるまで待ったり、的外れの考えや意見のように思われても、相手に体（顔）を向け熱心に聴いたりするよう指導している。
	13	間違った応答を笑わないように指導している。
	14	児童生徒一人一人を受け入れて認め、児童生徒の人間性を尊重するようにしている。
	15	チャイムと同時に授業を始め、チャイムと同時に授業を終えるようにしている。
	16	友だちの意見に反応しながら聞くように指導している。
	17	教師自身も自己開示をし、児童生徒から学ぶ姿勢をもつように気を付けている。
	18	活動時に相互評価を取り入れ、互いのよさを認め合うことができるようにしている。
	19	教師主導にならず、児童生徒の志向のスピードに合わせながら授業を進めている。
	20	発言をつなげ、集団で学び合いができるようにしている。
自己決定の場を豊かにもつ	21	児童生徒自身が、学習課題や学習方法、学習形態などを選択できるようにしている。
	22	児童生徒が興味・関心をもち、主体的に学べるよう、ICT機器の活用を図るなどして資料や教材提示の方法を工夫している。
	23	学習課題に対して、自分なりの見通しをもたせている。
	24	観察場面や思考場面で、見たり、考えたりするための視点を示している。
	25	自分の意見や考えをもたせるために、対立意見を生むような発問の工夫等をしている。
	26	一人で調べたり、考えたりする時間を十分に保証している。
	27	児童生徒が主体的に学べるよう、個に応じた支援を行っている。
	28	自分の考えや思考過程が残せるようなノートの使い方の指導をしている。
	29	児童生徒自身が、自分の考えをみんなの前で発表する場を設けている。
	30	児童生徒が今日の学習を振り返り、これからの学習について考えるような場を設けている。

れぞれの項目に対して4段階で自己評価をするなどして活用することを想定している。

これらの項目を見ると、基本的な学習態度を育む指導と、一人一人を生かして創意ある工夫をした指導が混在しており、やはり不可分な関係性であるこ

とが言える。また、教師が授業時の児童生徒の反応をつぶさに読み取り即興的にかつ適切に応じるような、かなり熟練した「指導力」が必要なものもあるが、学習のシステムや授業設計を意識して行うことによって生徒指導の機能を生かした学習指導が

行える項目もある。

2. 2 改訂版を踏まえた学習指導の具体

前章で紹介したチェックリストは旧提要における生徒指導の3つの機能をポイントにしたものであり、改訂版では4つ目のポイントとして「安全・安心な風土の醸成」が追加されている。以下、そのポイントに関する記述を引用する。

「児童生徒一人一人が、個性的な存在として尊重され、学級・ホームルームで安全かつ安心して教育を受けられるように配慮する必要があるます。他者の人格や人権をおとしめる言動、いじめ、暴力行為などは、決して許されるものではありません。お互いの個性や多様性を認め合い、安心して授業や学校生活が送れるような風土を、教職員の支援の下で、児童生徒自らがつくり上げるようにすることが大切です。そのためには、教職員による児童生徒への配慮に欠けた言動、暴言や体罰等が許されないことは言うまでもありません。」（文部科学省、2022、p. 15。下線部は筆者）

このように、いじめなどが大きな社会問題になっている中、改訂版では新たな項目として記載されている。特に学習指導の中でも配慮しなければならない箇所を下線で示したが、表2のチェックリストにもすでに手立てとして含まれているものと考えられる。また、改訂版で強調されているのは、「発達支持的生徒指導」の側面であり、教師は、全ての児童生徒を対象に、自主的・自発的に自らを発達させていくための様々な支援を行い、それは学習指導においても同様であると示されている。

こうしたことを踏まえ、生徒指導の機能を生かした教科指導が求められているが、改訂版では「教科の指導と生徒指導の一体化」について以下の4点を整理している。

- (1) 自己存在感の感受を促進する授業づくり
- (2) 共感的な人間関係を育成する授業
- (3) 自己決定の場を提供する授業づくり
- (4) 安全・安心な「居場所づくり」に配慮した授業（文部科学省、2022、pp. 46-48）

旧提要での教科における生徒指導の推進の在り方の理念を踏襲しつつ、改訂版では生徒指導の4つのポイントがそのまま授業づくりに対応するようになっている。

- (1) については、個々の学習の状況等を把握しつ

つ指導の個別化を行ったり、児童生徒の様々な興味・関心に柔軟に応じて授業を工夫したりすることや、ICTを積極的に活用することで個別最適な学びを実現できると示されている。

(2) では、お互いに自分の得意なところを発表し合う機会を提供する授業、発表や課題提出においてそれぞれの考えについて関心をもてるような授業づくりをすることを通して、失敗を恐れないことや間違いが許容される支持的風土を醸成することが重要であると述べている。

(3) については、授業で意見を述べたり、自らが課題を見つけ解決するプロセスを重視する授業を通してわかったことをまとめたりするなどの場면을意図的に設定するよう求めている。主体的・対話的で深い学びを促進することで自己決定の場面を保障することができるということであろう。

(4) は、改訂版において追加された重要な視点であるが、特に授業が行われる単位としての学級・ホームルームにおいて、お互いの個性を認め合い、「安全かつ安心して学習できるように配慮する」ようにすることが大切である。

このように考えると、改訂版における学習指導の具体は、旧提要の理念を再整理したものであるが、その際には「令和の日本型学校教育」や「個別最適な学び」、「主体的・対話的で深い学び」、そして「ICTの効果的な活用」といったキーワードを改めて意識しながら取り組んでいくことが重要である。したがって、今後は「生徒指導の4つの機能を生かした授業づくりのためのチェックポイント」がこうしたキーワードを含めてより具体的な授業場面として整理されていくものと考えられる。

表3は、改訂版における学習指導のキーワードを列挙したものである。次章以降で特に英語の授業について論じていくが、そのための足掛かりとしたい。

表3 改訂版における学習指導のキーワード

-
- ・ 個々の学習状況を把握し、指導の個別化を図ること
 - ・ 興味関心を引き出すよう授業を工夫すること
 - ・ ICTの積極的な活用を図ること
 - ・ 発表し合ったり学び合ったりする場面をつくること
 - ・ お互いの個性を認め合い、失敗を恐れない、間違いを許容するといった支持的風土を醸成すること
 - ・ 課題解決型の授業を通して達成感を味わわせること
-

3. 生徒指導の機能を生かした英語授業の言語活動

前章では、学習指導全般にわたって、生徒指導の機能を生かした授業場面や教師の配慮事項などを概観してきた。本章では、現行学習指導要領の外国語（英語）における言語活動について生徒指導の機能という視点から考察していきたい。

英語における具体的な授業場面を考える時、いろいろな場面や指導、支援が想定されるが、目的・場面・状況に応じて、相手に対する配慮をもちながらお互いの考えを伝え合うことを重視した英語授業の言語活動は、まさに生徒指導の機能をそのまま内包している。

文部科学省（2020）は、言語活動を通して指導するために必要なこととして、表4のような項目を整理している。

表4 言語活動を通して指導するのに必要なもの

- ・子供の既習語句や表現を把握していること
- ・教科書に設定されている様々な活動を把握していること、つまり確かな教材研究
- ・全体に、また、どの子供にどんな質問や声掛けをすればいいかが分かること、つまり深い子供理解
- ・学習規律がある学級を創っていること、つまり「学習集団」づくり
- ・言葉は、使いながら使えるようになるという意識
- ・子供とやり取り、子供同士でやり取りをして進める授業形態をどの教科等でも実践していること
- ・子供とやり取りをする英語力

このように、言語活動を通して、学級において子どもたちが自己存在感をもてること、共感的な人間関係があること、自己決定の場があり、自己の可能性を拓けることに留意するよう指摘している。

では、学習指導要領において、各技能・領域の言語活動例ではどのような配慮事項等が示されているかを概観する。次節以降、小学校外国語活動（第3・4学年）、小学校外国語科（第5・6学年）、中学校外国語科の3つについて見ていく（※紙幅の関係で、高等学校については本稿では扱わないこととする）。

3.1 小学校外国語活動における言語活動と配慮事項

文部科学省（2017a）において、小学校外国語活動では「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」の2技能3領域で3つずつの言語活動が設定されている。いずれにおいても、身近で児童の

興味・関心の高い内容を扱うことや必然性のある活動が行えるよう留意することを指摘している。とりわけ英語学習の入門期であることから、生徒指導の機能を踏まえた配慮事項が示されている。

まず、英語への抵抗感を軽減して達成感もてるよう多様な活動を展開することが記されている。例えば、話す活動の前に教師がモデルを提示したり、十分に練習時間を保障したりする必要がある。児童の自信や意欲を喚起するよう、「急がずに」「段階的に」指導することの重要性を指摘している。

また、自分の考えや気持ちを伝える際には、聞き手を意識してはっきりと分かりやすく伝えること、逆に聞き手はうなずきながら相手の話すことをしっかり受容する態度を育むことを指導することなどが書かれている。加えて、ペアやグループなどの活動形態についても、児童の実態に合わせて柔軟に対応することを求めている。

3.2 小学校外国語科における言語活動と配慮事項

5年生からは「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」に加えて、「読むこと」や「書くこと」も取り扱うこととなる。例えば、聞くことの配慮としては、内容理解の助けとなるようなイラストや写真などを参考にすることや、聞かせる事柄や英語のスピードにも留意することとしている。また、3・4年生の外国語活動では英語への慣れ親しみを重視し、習得を第一の目的としない「活動」であったが、「教科」として活用を通して習得を図る観点から、配慮すべき点においても、その言語活動を行う前段階の活動を「繰り返し」「継続的に」行うよう強調されている。

こうした継続的な学習を繰り返すことについて、教師がまず「やってみせる」指導を充実することや、話せるようになるには長いスパンが必要であるという点から、正しさに目を向けるだけでなく、むしろ児童の話す内容に対して「まずは教師が、児童の話す内容に共感したり驚いたり喜んだりする」（文部科学省、2017a, p.108）ような教師の具体的な言動にまで踏み込んだ記述をしている。

教師が間違いを恐れずに英語を話してみようとする姿勢を見せることや、児童の話した英語の正しさよりも内容について注目して褒めるような態度は、まさに上述の生徒指導の機能を生かした授業づくりのチェックポイントにも記されている。

また、書くことの指導においても、生徒指導の機

能に基づいた次のようなフレーズに注目した。例えば、「書いたものは残るため、児童に自身の成長を認識しやすく英語学習に対する自信をもたせるきっかけになり得る」(上掲, p. 110) ことや、「年間を通じて、全ての「書くこと」の活動において、文字を書くことができているか、できるようになっているかを丁寧に見届け、指導に生かす」(上掲, p. 111) ことなどである。

高学年になって英語を書いたり書き写したりする指導が入ってくるが、長期的な視点で丁寧に見取る指導が重要であることを述べている。

3. 3 中学校外国語科における言語活動と配慮事項

文部科学省(2017b)において、中学校では領域間の統合的な言語活動を行うなど、より高度で発展的な内容が示されていることから、たくさんのインプットがあることや繰り返し継続的に指導することが重要であると指摘している。

そこで注目すべき点は、できるだけ現実に近い具体的な場面設定の中で、当該の言語活動をなぜ行うのか、そのあとにどのような活動があるのかを事前に説明しておくなど、生徒が言語活動の目的や見通しをもって取り組めるように留意することである。

また、話すこと(やり取り)の領域では、「ペアやグループ等において多様な考え方や立場を共有する活動」「生徒の多様な考え方が生かされるように指導する」(いずれも、文部科学省, 2017b, p. 63) など、生徒指導の機能を踏まえた言語活動を行うことが重要であると述べられている。

4. 実際の指導場面から

英語の授業でたくさんの優れた実践が存在するため、全てを網羅することはできないが、本章では生徒指導の機能を生かした授業の実践について、いくつかの例を取り上げたい。

4. 1 聞く活動の個別最適化

従前は、英語を聞く活動はクラス全員で一斉に同じ音源を聞き、概要や要点を把握したり質問に答えたりするなどしていた。ここ数年では、GIGA スクール構想によって児童生徒は1人1台の端末を持っているため、教師がクラウド上に音源をアップロードしておけば、個々でアクセスしてわからないところを繰り返し聞いたり、音源のスピードを調節したりすることができる。

また、目的に応じてたくさんの音源を用意しておけば、児童生徒が自分の興味・関心に応じて選択して聞いたり、1つだけでなく複数の音源を聞いたりすることも可能になっている。個々が異なる音源を聞きあとかからその情報についてやり取りしたり、同じ音源を複数の児童生徒が聞いて、聞き取れた内容を確認し合ったりするなど、活動のバリエーションが広がっている。そして、一番のメリットは、聞き取ることが難しい場合にも、あるいは自分の解答が間違っていたとしても、そのことが他の児童生徒に分かりにくいことではないだろうか。

このようにして、心理的な負担を軽減しながら、聞く活動に継続的に取り組ませることで、少しずつわかることが増えていくと児童生徒が実感できるようにしていきたい。

4. 2 「漆塗り」と中間指導

最近の英語授業では、単元の学習をデザインする際に、学習の積み重ねは「漆塗り」のイメージで例えられる(直山, 2021)。コミュニケーションの目的・場面・状況をしっかり設定し、まずは言語活動をやってみて、言いたいけどうまく英語にできなかったことや、目標にせまるためにどのような内容可言えばよいかを考え、全体でシェアしたあと、それを踏まえてまた言語活動を行うような、課題解決型の構成である。

言語活動は実際に英語を使用して考えや気持ちを伝え合う活動であり、教師が児童生徒と実際にコミュニケーションを図りながら授業を進めていくことが大切である。とりわけ小学校では、教師が児童生徒の話す英語を受け止め、適切に応答することで、「児童は「英語が通じた」「自分のことを知ってもらえた」と自己存在感を高めたり、伝え合う喜びを感じたりすることができ」(直山, 2021, p. 39) など、生徒指導の機能を十分に生かすことができる。

また、意味のあるやり取りを重ね、話す内容や話し方などを改善し「塗り重ねて」いく上で、言語活動と言語活動の間の「中間指導」で内容や表現について全体で確認する時間を設けることがある。この際、目標の確認や評価基準を児童生徒とやり取りしながらルーブリックを決めていくような実践も紹介されている(例えば、藤本, 2023)。評価のポイントが与えられたものではなく、自分たちが近づこうとする姿を具体的にイメージさせることで、より主体的な学びにつなげていこうとするねらいがある。

4. 3 書く活動におけるピア・レスポンス^{*2}

文部科学省(2017b)は、まとまりのある英語の文章を書くことの言語活動の具体例として、ピア・レスポンスの手法を例示している。書いた文章をペアやグループで読み聞かせするなどして、質問したりコメントしたりしたことを参考に推敲する活動である。

大澤他(2020)は、中学校の英語授業でピア・レスポンスを実施し、その効果について次の点を挙げている。

- ・ 互恵的な学びに貢献できる場が自己存在感を育成する機会を生み出していること
- ・ 他者から得られた助言の中から、課題を達成するために自分で選択して推敲に生かせること
- ・ 書いたものの良い点を話し合う活動を取り入れることで、共感的な人間関係を育成できること

ピア・レスポンスがまさに生徒指導の機能を生かした活動の1つになっているという指摘である。一方で、この活動に対する生徒の反応として、文法や語の綴りなど形式面での間違いを指摘するような話し合いもあり、内容面に踏み込んだものになるようにする配慮が必要であることも述べている。

学習指導要領ではピア・レスポンスについて「内容について質問したり、コメントを述べたりする」(文部科学省, 2017b, p. 68) 活動であることが例示されているが、そういった実践において、中学生段階では文法などの形式に目が向きがちなこと指摘されている(例えば、小野・石塚, 2020)。

安全・安心な居場所づくりに配慮した授業という意味においては、よかったところに目を向けさせ、話題を広げたり内容を深めたりするためのピア・レスポンスであるという意識を生徒に指導することも大切になるであろう。

4. 4 効果的な ICT の活用

改訂版においては、ICT のよさを積極的に活用し、発達支持的な生徒指導に生かすことが重要であることが示されている。

英語の授業においても、GIGA スクールのもとで様々な授業実践がなされているが、特に、全ての児童生徒を対象にした生徒理解を指導に生かすといった観点から、UDL(Universal Design for Learning)に基づいた英語授業の展開も重要であり、これはICTの活用は親和性が高いものとされている(例えば、沢谷, 2022)。

授業でICTを用いることにより、1人1台端末に

よる指導の個別化や学習状況の可視化、データ駆動型の学習の展開といったことはもちろん、全体の場合での質問や発表が苦手な児童生徒は、例えばチャットで個別に意見を述べるができる。教師からそれは正しい、素晴らしいというフィードバックがあれば、児童生徒に自己存在感を与え、自分の意見を安心して伝えるようなシステムを作ることができる。

また、いわゆるタスクベースの授業展開では、児童生徒が言語活動を通してICTを活用して発表したり、ポスターなどの「成果物」を作成したりすることがある。札幌市立真栄小学校の中島裕美教諭(外国語専科)の実践^{※3}では、児童が作成したポスターに発表動画や音声をQRコードで埋め込み、お互いに鑑賞できるようにした。卒業作品展で成果物を校内に掲示した際にも、保護者が発表をQRコードで鑑賞できるようにしたところ、大変好評を得たという。参観授業以外の場でも学習成果を保護者に見てもらえるような工夫は、保護者と学校との信頼関係を築くことにつながるのではないかと考える。

5. まとめ

本稿では、『生徒指導提要』の旧提要と改訂版のポイントを踏まえ、主に英語の授業で生徒指導の機能を生かすという点について、学習指導要領における言語活動と配慮事項、また実際の授業場面などについて考察した。

言語活動を行う際には、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて様々な学習形態を効果的に活用することが必要となる。そのため、ペア・グループ活動などの協働的な学びの場は、安全・安心な雰囲気の中で行われなければならない。そのことが特に外国語科の指導において、児童理解や生徒指導が充実していることが重要であると言われるゆえんである。ただ、このペア・グループ活動は、いつでもうまく機能するのだろうか。

石川(2007)は、児童生徒が学習集団として安心してコミュニケーションを取るためのポイントとして以下の5点を整理している。

- (1) 学習者の学習状況を十分「リサーチ」すること
- (2) 見通しをもって楽しく学習できる「手立て」を準備すること
- (3) 意欲的に取り組める「課題」を設定すること
- (4) 学習をコントロールする「枠組み」を用意すること

- (5) 繰り返し取り組める「システム」を作ること
(石川, 2007, pp.17-18)

英語の授業に限らず、教育活動全般で言えることだが、言語活動を行う際には、こうした視点も改めて考慮しながら、適切な活動形態が選択できるようにしたい。

なお、本稿では生徒指導の機能から学習指導（特に英語の授業について）だけを取り上げて論じたが、生徒指導の機能が全ての教育活動や保護者、地域の役割や期待などとの有機的な結び付きもあるため、決して単純なものではない。また、本稿で考察している英語授業の実践等は小・中学校が混在しており、各学校種における児童生徒の発達段階に応じた指導やグラデーションを考慮することも必要になるであろう。

いずれにしても、何より安全・安心な場所としての学習環境を確保し、児童生徒が自発的にお互いを認め合う場をつくることが肝要である。

注)

※1 MEXT=Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (文部科学省)

※2 ピア・レスポンスにはピアレビューやピア・フィードバックといった用語もあるが、本稿においては定義を区別することなく同義として用いる。

※3 札幌市立真栄小学校の中島裕美教諭の実践は、主に北海道内の小学校英語教員がオンラインで研修をしている DEEN (Dosanko English Education Network) 2022 年 6 月 25 日の実践発表に基づく。

参考文献

- (1) 文部科学省：生徒指導提要（改訂版），2022。
2023 年 2 月 15 日アクセス，
https://www.mext.go.jp/content/20221206-mxt_jidou02-000024699-001.pdf
- (2) 文部科学省：生徒指導提要，教育図書株式会社，2010。
- (3) 滝充：小学校からの生徒指導～『生徒指導提要』を読み進めるために～，国立教育政策研究所紀要 第 140 集，301-312，2011。
- (4) 藤勝宣：生徒指導の研究（その 2），教養研究，24 巻 3 号，35-55，2018。
- (5) 井上浩史：今，教師と学校に求められていること：生徒指導の観点で考える力のある教師・学

校とは，同志社大学教職課程年報，9，78-90，2020。

- (6) 川上知子：中学校における生徒指導の具体的な教育実践における考察—理論と実践の往還の視点による事例検討—，教育研究実践報告誌，第 4 巻第 1 号，1-8，2020。
- (7) 秋田県教育委員会：生徒指導の基本姿勢について～生徒指導を行う際に強調される三つのポイントを生かした学級づくり，授業づくり～，2021。2023 年 2 月 16 日アクセス，
<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/23422>
- (8) 文部科学省：「言語活動」の設定・「言語活動を通して」（資料），2020。2023 年 2 月 21 日アクセス，
https://www.mext.go.jp/content/20200721-mxt_kyoiku01-000008881_1.pdf
- (9) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編，開隆堂出版，2017a。
- (10) 文部科学省：中学校学習指導要領解説 外国語編，開隆堂出版，2017b。
- (11) 直山木綿子（監修）：小学校の外国語教育の指導と評価，文溪堂，2021。
- (12) 藤本祥太：豊かな学び手が育つ授業の創造—主体的・対話的で，深い学びの実現を通して—（実践報告），第 18 回全国小学校英語教育実践研究会高知大会研究集録，94-97，2023。
- (13) 大澤征矢・佐々木来望・安田裕希・森健一郎：「授業力」の獲得を目指した実践報告—「生徒指導力」と「新たな教育課題への対応力」を生かした手立ての確立を通して—，北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要：教職大学院研究紀要，10 巻，97-110，2020。
- (14) 小野祥康・石塚博規：中学生のライティングにおけるピアレビューの効果—流暢性・正確性・複雑性に焦点を当てて—，HELES JOURNAL，19，116-129，2020。
- (15) 沢谷佑輔：SDC モデルと学びのユニバーサルデザイン (UDL) の枠組みによる英語の授業での ICT 活用の分析，北海道文教大学論集 (Journal of Hokkaido Bunkyo University)，23，1-13，2022。
- (16) 石川晋：ペア・グループ学習の基礎技術を活用する 5 つのポイント，クラスに安心感が生まれるペア・グループ学習，10-21，学事出版，

2007.